

歌語としての「やど」における空間把握とその変遷

―万葉集と古今集―

時田 麻子

(1) はじめに

上代・中古の、空間を構成する語のひとつに「やど」がある。「やど」は今日では宿泊場所という意味を指示することがほとんどであるが、上代・中古の「やど」に対する用法は必ずしもそうとはいえない。

「やど」語に対する論文には後藤和彦氏「いへとやど―万葉を中心に―」(薩摩路十一卷一九六七・二)、森淳司氏「万葉の「やど」」(『万葉とその風土』、吉井巖氏「いへ・やど・やね」(萬葉一〇四卷一九八〇・七)、田中大士氏「我がやどの鶯―家持の空間構成―」(『日本古典文学の諸相』一九九七)、半沢幹一氏「私物化された自然空間―古代和歌における「わがやど」―」(表現研究六六卷一九九七・一〇)、中西進氏「屋戸の花」(『論集上代文学』一九七二)などがあり既に一定の結論が示されている。建築学者からも木村徳国氏「わがやど」―花鳥風月の住宅観の成立―」(『上代語にもとづく日本建築史の研究』一九八八)、若山滋氏「家」と「やど」―建築からの文化論(一九九五)といった論が提示されている(以下、引用は特に明記のない限り以上の論文より行っている)。これらは空間論的見地で「やど」と「いへ」の違いをとらえるものといえ、用例を数的データとして処理するという方法を用い、この方法を用いてもほぼ同様の結論を得ることができるとを示す。本稿は以上のような先行の研究に立脚し、「やど」の空間把握とその変遷

を考えるものである。

「やど」語と、表現上その動詞形と考え得る「やどる」、さらに類義語と考え得る「やどり(名詞)」を、「やど」とそれに類する表現として一応このような分類の元に認定しておく。そこで、以上三語を便宜上「やど類」とひとくくりしておく。以下、「やど類」と表記した場合は以上三語を指すものとする。

また、これを別語として考えていいのか判断としないが、「やど」「やどり」の各名詞にはそれぞれ動詞「す」を伴い「やどす」「やどりす」という「やどり」と「す」の複合動詞的用法が存在していることも指摘しておく。ただし、これは『万葉集』にはまだみられない。

さて、「やど」と「やどる」「やどり」とは、後に述べるがそもそも別語として用いられていたようで、中古以降生じる「やどす」などという(複合)動詞とともに、語の分化と変遷について考える必要がある。考察の際、本稿として着目する点は、上代・中古において「やど」の空間をどのように把握していたかということである。

(2) 万葉集ならびに上代

まず「やど類」語のそもそもの意義と分類を考察するために、上代を概観する。

はじめに、上代における「やど類」語の用字を見ると、「ド」の音が甲類、乙類ともに存在していることがわかる。ここでの対立は「やど」と「やどり」「やどる」で大きく分かれる。「やど」はほとんどが甲類で（一部に例外がある・夜柙。これは境田四郎氏によれば「やどり」に近い用例と指摘されている）、「やどり」は乙類を指示する文字、あるいは「宿」字が用いられている（注1）。以上のことから、もともとは「やど」と「やどり」「やどる」は別語であった可能性が存している（注2）。この前提をまずは確認しておかねばならない。

木村徳国氏によると、上代において「やど」は万葉集に特異な語彙であるという。というのは『古事記』『風土記』には一例もみられず、『日本書紀』に一例みられる（神代第七段一書第三）ものの、その訓は「やどり」である可能性が高いからだ（木村氏は考えている。すなわち、「やど」と「やどり」「やどす」の間にはすでに分布の差があったということになる。そして分布の差は、「やど」「やどり」が別の読みであったというだけでなく、別の読みであったことに付随して考えられる、そもそも違う意味を持つ、ということが原因となり生じるものと思われる。木村氏はこの結果を下敷きに「やど」が「やどり」「やどる」との比較において「優れて日本語」だと結論を出した。では「やど」と「やどり」「やどる」の違いは何か。

今回は両者の違いを検討するために『万葉集』を中心にみることにする。

『万葉集』の「やど類」語をみると、「やど」一一九例（重出除く）、「やどり」二〇例、「やどる」七例である。この中で分類すると、万葉集における「やど」語の用法が明らかにになる。その用法はすでに先学の論ずるところで、それらを総合させると大きく分けて四つの結論がもた

さて、『万葉集』における「やど」についてであるが、多く「屋戸」「屋前」と記された「やど」と風物（植物や鳥など）との間は非常に近しい関係にあるということが全用例に占める割合の多さから考えても理解でき（注3）、「やど」の空間を把握するにあたつて以上のような「花鳥風月的」特質は認められてよい。

しかし一方で「我がやどの簾動かし秋の風吹く（四・488）」といった表現に関しては風物を描くことではない。こういった例の存在も認められるが、これらの表現は「花鳥風月的」とは言いがたいものの、空間把握上は風物を描く「やど」と同質だといつてよい。その理由は、四・488番歌では主体（作者）が「やど」内部にあつて、認識が内部にとどまっていると考えられるところに求めることができる（しかし「やどの簾」の部分だけが外部との接点と考えることもできるので、多少空間把握にずれがあるかもしれない）。

しかし、これだけでは風物の描かれない「やど」と、風物とともにある「やど」の間がまったく同質のものとはいえない。先に述べた「我がやどの簾動かし秋の風吹く（四・488）」といった表現は認識が内部にとどまると言えるが、ほかに複数見いだせる「やど借る」とした表現を、風物を描かない「やど」の例としてあげることができる。また、境田氏の指摘する一五・380も「海辺のやど」とあるばかりで具体的な風物は出てこない。これらは旅先での「やど」を表現しているため認識が内部ではとどまり得ないからである。風物の描かれる「やど」と描かれない「やど」の、「やどる」「やどり」との間の共通点・相違点については明らかにしておきたい。

先に述べたように『万葉集』における「やどり」「やどる」の例は「やど」に比べると少なく、あわせて二七例である。しかし「やどり」「や

らされる。それは、

①大多数が平城遷都後に用いられ、天平期を中心に用いられた語である

②中央・知識人的用語である

以上は用例の数を分析することによって得られる結論である。また、③「いへ」が人との関わりの中にある一方で「やど」は建物を含む敷地を示す

④「わがやど」という表現が多分に典型的で、私的に限定された空間である

といったことである。

また、先行研究から「やど」の空間把握のために参考になると思われることを記す。森淳司氏は、「やど」という歌語を屋（や）の外（と）にみえる小世界を歌うもので、花鳥風月に対する意識が強いとされた。また、木村徳国氏は「やど」の詠まれ方から判断し「わがやど」という語の成立を「日本住宅史に貫通する「花鳥風月的住宅観」の端初に位置するものと捉えるべき」と考えている。この木村氏の記述は注目すべき指摘であり、中西氏が、上代の日本人が、庶民は直土の竪穴住居に近いものに住んでいたことと、高級官僚が屋根をかけた建物に住み始めたこと、という、すまいに対する身分差の存在に「やど」の認識に対する実際を考えていることも関連して、示唆的だと思う。「屋」をかけることのできるすまいを持つことのできた者（高級官僚と言ひ換えられる）が、「やど」語を用い、花鳥風月を詠み込むことをはじめた、と考えるのは、「やど」を用いて作歌する歌人たちの身分から考えても妥当な予測だといえる。なお、このような意義を「屋」にとらえるならば、「屋」という用字が訓もさることながら義によつても用いられ、そのために用字の主流となりえたと推測することはゆきすぎではないだろう。

どる」は「旅」という語と用いられるか、地名や人名、「仮の」とともに表現される例しかみられないことから考えて、あきらかに「旅先の、我が家ならざる」場所を指示している。名詞「やどり」について考えると、複合動詞としての「やどりする」という表現も九例用いられるが、「やどりす」は動詞「やどる」と同様に旅先で休息（あるいは宿泊）することとらえることには問題はあまい。そこには景物や住まいとしての意味は希薄であつて、「やどり」の中に建築的構造体（「やど」で考え得たような「屋」の存在）を意識の中にもっているかどうかは明らかではない。

さて「やどる」「やどり」と「やど」の間には発音の差があり別語だっただろうと推測できる（境田氏、伊丹昇氏など）ことは先に述べた通りだ。そのため、以上のように認識、意味が違うのは当然だと考えることもできる。しかし、巻二・126/127、巻十二・323、巻十八・418など、「やど借る」や詞書に「北里が家に宿る」とある上で歌に「やど借る」とされる「やど」の用例は先述のような四つの解釈のどこにあてはまるものか、判断しかねるところである。巻十一・323の用字は「宿」であつて、異訓「ヤドリ」とあるように『校本万葉集』巻十二・323は「やどり」に入れるのが適当かもしれぬが、そのほかの「屋戸」「夜度」という用字については「やど」とよむことは、「屋」「夜」いずれも甲類の仮名であることから可能性が高く、「やど（甲）」という発音を示しながら「やど（乙）」で表現される意味を示している例といえる。また、先にも述べた十五・380は「り」がないものの「ど」が乙類の仮名であり、こちらも「やどり」で表現される意味を示していることは注目すべきだろう。ここに「やど」と「やどる」「やどり」との接点を見いだすことができる。

以上「やど」と「やどる」「やどり」はもともと別語であると考えられ、主としての用法（それぞれ住居と旅行）には明らかな差があるのだが、ともに人の存在する（人を内包する）空間として把握されている用語といえる。そして、「やど借る」の場合などでは、「貸す」人にとつては「やど借る」といわれたときに、自分のすまい（「やど」と言い換えることもできる）を貸していると考えられよう。すでに「やど」と「やどり」は混淆し始めていて、そう考えれば、「宿」字「やどり」訓によつて表現される旅先の（現代的意味での）宿という意味が「やど」という訓を持ち始めることは、予想される展開とはいえないか。

この仮説について、今回とりあえず上代から中古への展開を導くものとして、『古今和歌集』を手始めに考えたいと思う。

(3) 古今集

『万葉集』に行われていた空間把握が、『古今和歌集』に継承されているのか。また、どう展開されるのか。『万葉集』と同様の方法で考える。

「やど」類の総用例数は五二一首五五例、その内訳は「やど」三六例（歌のみ）、「やどる」八例（詞書六例）、「やどり」一一例（同）「やど」四例（歌のみ）である。

*やどる・やどり

まず、全用例数を概観してみてもすぐにわかることとして、「やどる」例の詞書に占める割合が注目される。『古今集』中、「やど」は全用例が

の属する建造物を示すこともある。そう考えると、「やど」と「いへ」はそこまで厳密に区分できるものではないだろう。物理的には「やど」の指す空間と「いへ」の指す空間が重なる部分をもつと見なすことができよう。

さて、一方で「やどる」には『万葉集』にみられなかった新しい用法が見られることも指摘しておきたい。「月やどるらん（夏・一六六、深養父）」などといったものがそれで、旅先で人がとどまるのと同様の感覚を自然の景物に再現したものと考えることができ。『古今集』で擬人法が急増していくことも、こういった用例の発生に関わってくると思われるが、「やどる」の新しい用法として考えておきたい。そして、この種の例は『古今集』に二首登場するが、これ以降三代集でも月に限らず露など「風物」に対して「やどる」を使う用法があり、決して『古今集』に特異な用例として片づけることはできない。

次に「やどり」について考えてみよう。『万葉集』の項で見たとおり、上代では「やどる」と「やどり」は、登場する用例における状況は「やどり」する」も含めて「旅先で泊まる」という点で共通している。『古今集』の「やどり」についても「旅」という語は伴わないものの、基本的に「旅先」であることは踏襲しているといえる。

ただし「やどる」と同様に『古今集』以降「雲のやどり（物名・四三〇）」など、風物に対して「やどり」という語を用いる例が生じる。これもやはり擬人的な用法といえる。しかし、詞書で「いへ」といい、さらに詞書または歌で「やどり」を伴う例は見いだし得なかった。これは「やどり」が「いへ」のもつ、また、先に述べた「やど」の持ち始めている空間認識を持たないことを示しているように思う。

歌の中で用いられるのに対し、「やどる」はほとんど詞書に用いられている。それは「やどる」の原義を考えれば理解しやすいと思うが、作歌背景を語る詞書において、旅に出て泊まることを述べるために用いたのだと考えられる。現に、『万葉集』において「やどる」にみるような旅に出て泊まるという意味での用例は例外なく詞書にあらわれる。これは『万葉集』から引き続いて見ることのできる用法である。

ここで注目しておきたいのは、この中には詞書に「いへ」を含み、さらに「やどる」語がある例を複数確認できるということだ。これらは「いへ」に「やどる」ということになり、『万葉集』における例とは違い「やどる」先の空間（ここでいう「いへ」）を明らかに認識に含めていることになる（『万葉集』においては巻十八・413にのみ見られた例）。しかし、「やど」に「やどる」とする例はない。

これに限らず「やど」が詞書には一例も見いだせないし、逆に「いへ」は歌では一例も現れない。この認識は「やどる」先は「いへ」であつて「やど」ではないという認識と考えるのだが、詞書に「いへ」をもち、かつ歌にその「いへ」のことを「やど」として詠む例も確認でき、こちらは「やど」と「いへ」が同じ空間を指示しているともいえる。この差は非常に興味深い。

物語などの散文作品を見ると、「やど」と「いへ」の使い分けは明らかで、「やど」は歌に、「いへ」は地の文に用いている。この使い分けについては後藤和彦氏が検討しており、「やど」は「建造物そのもの」として、あるいはその存在所として、客観的な即物的なところへ方、「いへ」は「私生活の基盤」としての場として、むしろ精神的にも緊密な関係にあるものとして主観的な機能的なところへ方「だつた」としている。この考えは大筋で首肯できるものである。しかし、「家」と言ったときに、自分

*やど

では「やど」はどうか。総歌数に対する「やど」の割合は『万葉集』と大きく異ならないが、その傾向はどうか。『万葉集』における「やど」の特徴として先に述べた①・②は『万葉集』に特有の特徴であるから当然あてはまらないわけだが、③・④は「やど」が固定された意味を持つていれば『古今集』でも踏襲されるはずなのだ。すなわち、「やど」は建物を含む敷地を示し、私的に限定された空間として「わがやど」という表現が多分に類型的に、風物を歌うものとして用いられるということが、『古今集』でも同様に見られるはずなのだ。

しかし、すでに『万葉集』でも指摘したように「やど借る」という表現などに、上記を逸脱する用例を見いだした。『古今集』でも「やど」の貸借は五例挙げられる。これをはじめとして、「やど」を外側から把握する用例として「うちつけにさびしくもあるかもみぢばもぬしなきやどは色なかりけり（哀傷、八四八）」「みよしの山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ（雑下、九五〇）」「あすか川ふちにもあらぬわが宿もせにかはりゆくものにぞありける（雑下、九九〇）」などを見ることのできる。これらは「わがやど」に代表される私的に、ある意味で閉ざされた空間であるはずの「やど」を逸脱する例と考えてよからう。

しかし『古今集』においても「やど」は「わがやど」とされること、景物を詠み込むことが詠歌の主体であつたことはまだ否定できない。このような用例を見ると、一首の最終的な視点は自らの属する内部空間としての「やど」に収束されていることが明らかであるが、一方ではやはり『万葉集』からあらわれていた旅先の「やどり」を指す例も持つて

いる。

そして、宿泊する場所ではない、自らの「やど」全体を「やど」の外側から見つめる視点を『古今集』にあらたに指摘することもできる。ここでは、「やど」が花鳥風月のな風物を持つているかどうかは注目されていない。風物を詠み込む主要な「やど」の用法とは違って、どんな空間かではなく、空間そのものを見つめる視点を持ったといえるだろう。この視点は「やど」も「やど」も同じといえる。

ここまで見てくると、「やど」の主たる用法であるところの、花鳥風月の風物を詠み込むことは、自らの属する空間の中で空間把握を完結させていることであるのに対し、それ以外の「やど」も「やど」も「やど」もその内部空間を求めず「やど」と呼ばれる空間そのものとして把握するものであったのだと考えることができるように思う。すなわち、おなじ「やど」語を用いても、『古今集』においてその空間把握の方法は「やど」も「やど」も「やど」に見る外部からの視点を吸収し、「やど」語の中で二分されたといえるのではないか。

(4) 『古今集』以降(課題として)

現代において「やど」が旅先の宿泊(施設)を示すことは確かであって、その中には『万葉集』で「やど」語が現れたときに主たる用法であった風物を見る意識は全く含まれていない。それは、「やど」が歌語に属する語であることもかわるのかもしれないが、少なくとも「やど」と言ったときの意味認識が古代とはまったく違うものであることは否めない。ということは、古代と現代をつなぐ線が、細くともどこかでつながっているはずだと思う。その点で、上代から中古へのつなが

りという意味でなされた本稿は、いまだに消化不良のものといえる。しかし、「やど」と違う意味を持つ「やど」も「やど」も「やど」も(現在の「やど」語に近い語)との接点は上代にすでに現れている。また、「やど」の空間把握について考えると、「やど」を内部から主観的にとらえるのではなく、外部から「やど」という形態をとらえる把握方法が、和歌に限定された、内部を語る用法からの脱却を示すのではないだろうか。『万葉集』から『古今集』に至るまでもたらされたこの緩やかな変化が、以降の勅撰集においても進むのではないかと、筆者は予測をし、ある程度の用例検討を行っているが、今の時点ではまだ広く一般に問える形になっていないため、ここでひとまず、筆を擱きたい。

*作品本文の引用は小学館『新編日本古典文学大系』に拠った。

*注記

(注1) 境田四郎氏「萬葉の「ヤド」と「ヤドリ」」(女子大文学七、一九五五・三)

(注2) 「やど」語の用字は「屋戸」が最も多く、続いて「屋前」である。ほかに「夜度」「耶登」「屋外」「屋度」などがみられる。

(注3) 「やど」の用例全一九例中、何らかの形で植物・動物が詠まれている歌は一〇〇例にものぼる。

*参考文献

伊丹昇 「ヤド」と「ヤドル」 『文学論叢』三二巻 一九六五・

六

木村徳国 「わがヤド」―花鳥風月の住宅観の成立― 『上代語に

もとづく日本建築史の研究』一九八八 中央公論美術出版

後藤和彦 「いへとやど」―万葉を中心に― 『薩摩路』十一巻 一九六七・一

田中大士 「我がやどの鶯―家持の空間構成―」 桑原博史編『日本古典文学の諸相』一九九七 勉誠社

中西進 「屋戸の花」 万葉七曜会編『論集上代文学3』一九七二 等間書院

半沢幹一 「私物化された自然空間―古代和歌における「わがやど」―」 『表現研究』六六巻 一九九七・一〇

森淳司 「万葉の「やど」」 『万葉とその風土』一九七五 桜楓社

吉井巖 「いへ・やど・やね」 『萬葉』一〇四巻 一九八〇・七

若山滋 「家」と「やど」―建築からの文化論』一九九五 朝日新聞社